山陽スピリット ニュース　No.22

2020（令和２）年12月21日

発行：学校法人 山陽学園　広報・山陽スピリット推進室

山陽学園の教えは、人生を強く美しくする

堀 江 佳菜子（旧姓：荒井）
山陽学園大学 平成20年卒業

昨年末、突如発生した新型コロナウイルスは猛威を振るい続け、未だに収まることはありません。先生方、そして学生の皆さんは、先の見えない不安を日々感じられていることと思います。

今までの常識の多くは覆され、世界中の人達が、新たな生活様式に移行するために試行錯誤を繰り返しています。誰もが未知であることがこんなにも恐ろしいものであると、私達は今、身をもって学んでいます。どうか一日も早くこの事態が収束に向かい、私達が過ごしていた「普通」の日常が戻ること、そして卒業生の一人として、山陽学園の皆様の健康と無事を願っています。

早いもので、大学を卒業してから１３年の月日が経とうとしています。私と山陽学園大学との出会いは、高校２年の冬のことでした。志望校に悩み、進路指導室にあった資料を見ていた時、ふと目に入った「コミュニケーション学部」（現：総合人間学部）という見慣れない学部名に興味を惹かれたことがきっかけです。

学部名のとおり、山陽ではコミュニケーションを様々な方向から学ぶことができました。必修科目の「コミュニケーション概論」は、相手の気持ちを読み取りながら効果的なコミュニケーションを取る方法やその基礎を学ぶことができ、社会に出てから非常に役立つことが多く、多文化共生の今、とても有意義なものだったと実感しています。

私は英語コースを専攻しており、文法などの基本的な英語から、コミュニケーションに必要な「話す力」「聞く力」をつける講義は、それまでの「なぜ？」を紐解き、知識をさらに発展させてくれるものでした。また、他コースで興味のある講義をカリキュラムに組み込むことができたことで、視野を広くし、学びへの意識を高くしてくれました。

中学、高校から山陽学園に通っていた人も多い中、私は大学での４年間のみ山陽学園で過ごしました。その学園生活の中で強く印象に残っているのが、上代淑先生の教えです。「日々のおしえ」という上代先生のお人柄がよく現れたその教えの数々は、初めて聞く私にとっても、心の奥にすっと溶け込むような心地のよいものばかりで、今も折に触れてその教えを思い返しては、心の糧にしています。

私は、今もこの「日々のおしえ」の日めくりを玄関に掛けており、毎朝声に出して読んで、心を穏やかに整えてから出かけるのがルーティンとなっています。不思議と、その日の気持ちに合った教えが当たったり、その日の教えの通りに行動してみるとうまくいった、ということがよくあるのです。皆さんも、同じような経験があるのではないでしょうか？

私が特に好きな教えは、「美しい行いは美しい心から」です。在学中、ある先生から「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花と言われるような、立ち居振る舞いが美しい女性を目指しなさい」と、教えていただきました。勉強や仕事、家事などで忙しく、イライラして心にゆとりがなくなると、自分の立ち居振る舞いを気にする余裕もなくなります。まずは自分の心を落ち着かせ、ゆとりを持たせることで、初めて

「日々のおしえ」の好きな言葉

所作にも美しさが出ると思うのです。忙しい時にこそ、この教えを思い出し、心を落ち着かせる時間を作っています。

私は今、生まれ育った岡山を離れ、主人の故郷である島根県西部の自然に囲まれた小さな町で暮らしています。岡山ではあまり感じることのなかった、人と人との深い付き合いや、地域に密着した暮らしのなかで、山陽学園の教えである「愛と奉仕」を感じられることも少なくありません。

私の住む地域では、2019年に日本遺産に認定された伝統芸能「石見神楽（いわみかぐら）」が大変盛んで、小さな子どもからお年寄りまで、とても多くの人に愛されています。

石見神楽とは、島根県西部から広島県北西部地方に受け継がれているもので、上演される演目は岡山の備中神楽にもある「八岐大蛇（やまたのおろち）」が有名ですが、石見神楽はテンポが速くリズミカルであり、火花やスモーク、ブラックライトなどの近代的な演出や、衣装が美術品のように絢爛豪華なのも特徴です。

現在小学１年生の息子も、こちらに来てすぐにその迫力に魅了され、今では石見神楽の社中（しゃちゅう）に入り、神楽舞を習っています。実は、石見神楽の社中は皆それぞれに仕事を持っている有志の集まりであり、プロの舞手はいません。石見神楽が好きだという気持ちはもちろんですが、自分が受け継いでいきたい、また受け継いで欲しいという強い思いを持って、子ども相手にもわかりやすく熱心に指導をしてくださる優しさや熱意は、この地域の石見神楽に対する「愛と奉仕」だと感じています。

迫力満点！石見神楽の鬼

私は在学中、児童英語のゼミを選択し、卒論では小学生を対象とした効果的な英語の授業に関する研究をしました。当時は、自身の勉強も兼ねて、小学校の「総合的な学習」で月に数回行われていた英語の授業に、発音指導のボランティアとして参加していました。

小学校での英語の授業は、席に座って先生の話を聞くだけではなく、歌やゲームなどで体全体を使った活動もします。子ども達が「英語が話せた！」という達成感を感じ、「英語って楽しい！」と思えることは、中学校から始まる英語の授業への不安を取り除くことにもつながり、小学校英語教育にはメリットがたくさんあると感じられる貴重な体験でした。

2020年から、いよいよ小学校での英語教育が必修化となり、児童英語を学んできた私にとっては非常に興味深いニュースでした。私も小学生の子どもを持つ親として、もしかしたら学生の時の経験が何かの役に立つかもしれないと思い、約１年をかけて「小学校英語指導者資格」を取得しました。仕事や家事に加え、子どもがいる中での勉強は思ったよりも大変でしたが、自分の好きなこと、得意なことを子ども達に教え、伝えていくことも「愛と奉仕」につながるのかもしれません。

私達が教えられた「愛と奉仕」は、日々を生活していく上で実は欠かせないものであり、たった4文字の短い言葉の中に込められた意味はとても深いものであると、今になってその教えの重みと大切さを感じています。

上代先生の教えは、私達にとって生活を支える「根」であり、そこに私達が「花」を咲かせるために必要な「水」や「太陽」のような存在ではないでしょうか。

花にはそれぞれ開花に適した時期があるように、私達の花もいつも咲かせられるわけではありません。時には、芽が出るまでに時間がかかることもあるでしょう。そんな時は「辛抱第一何くそで」、芽を強く育て、大きな花を咲かせるための準備期間なのです。

上代先生の優しく美しい心だけではなく、人間としての芯の強さを、私達も受け継いでいかなければなりません。

山陽学園との出会い、そして上代先生の教えは、私の心の栄養であり、日々のお守りとなっています。山陽で過ごした思い出と上代先生の教えは、これからの私の人生を強く美しく、花のように彩り豊かなものにしてくれると信じています。